

I

稲発酵粗飼料の取り組みのポイント

I 稲発酵粗飼料の取り組みのポイント

自給飼料の増産に向け、稲発酵粗飼料は重要な柱として位置付けられており、近年、WCS 用イネ専用品種の育成や栽培から収穫・調製、給与にわたる広範な技術開発が進められている。稲発酵粗飼料の生産利用に当たっては、これらの新技術を活用し、単収の向上や品質の改善、生産コストの低減に努めていくことが必要である。

また、WCS 用イネは耕種農家でも栽培が可能であるほか、生産ほ場の団地化や保有している農機具の有効利用、堆肥の活用等の観点からも、耕種部門と畜産部門が密接に連携することが地域での取り組みにおいて重要となる。これらの取り組みを一体的に行い、低コストでの稲発酵粗飼料の生産利用を進めるため、以下の点に留意する。

1 耕畜連携

(1) ほ場の団地化

WCS 用イネの栽培においては、収穫前の落水を始め水管理の時期が食用イネと異なるとともに、収穫・調製に重量の重い機械を効率的に稼働させる必要があること等から、用排水系等を考慮した団地化を行うこと。

(2) 機械等の有効活用

ほ場条件や収穫時期等の労力の状況、地域内における既存機械の利用状況等を踏まえ、収穫・調製作業に使用する機械、実施方法を検討し、効率的かつ低コストに稲発酵粗飼料の収穫・調製作業等を実施すること。

条件によっては、コントラクタ等の組織活用を図ること。

(3) 堆肥の活用

WCS 用イネを生産したほ場からはイネの茎葉部も含めて収穫されることから、有機物の供給が不十分となるため、稲作農家と畜産農家の間で連携を図りつつ、堆肥の施用に努めること。

2 生産・給与技術

(1) 品種の選定等

WCS 用イネ専用品種の育成が進み、北海道から九州までの地域で専用品種の栽培が可能となった。栽培地域の自然条件や対象品種の生育特性を十分考慮し、適切な品種を選定するとともに他作物との間に作業競合が生じないような作期・作型を設定すること。

(2) 栽培

WCS 用イネ専用品種は、食用イネ品種に比べ穀粒が大きい場合が多いため、千粒重に応じて播種量を増やし、欠株の発生や苗立不足を防ぐこと。また、食用イネ品種より茎葉・子実の生長、肥大能力が高く、その多収能力を生かすために多肥栽培とすること。

(3) 収穫・調製

黄熟期での適期収穫を円滑に行うため、出穂期後のかんがいを制限し、ほ場の地耐力を高めること。また、品質の良い稲発酵粗飼料を生産するためには、適切な水分含量や梱包密度、密封の確保等サイレージ調製の基本を徹底し、場合によっては乳酸菌の添加等を行うこと。仕向ける家畜に応じ適切な収穫時期を設定すること。

(4) 給与

稲発酵粗飼料は、泌乳牛や肥育牛でも幅広く利用できることが確認されてきた。

給与に当たっては飼料分析を行い、牛の状況に合わせた適切な飼料設計を行うこと。